『釋摩訶衍論』における「真生二門」の一考察

――「十種名」を中心に――

関　悠倫

はじめに

副題である「十種名」とは、本論『大乗起信論』（以下『起信論』・本論）について独特な理論で注釈された『釋摩訶衍論』（以下『釋論』）「解釈分」解釈で説かれる。小論では「十種名」をたよりに『釋論』における「二門」について理解を深めることを目的とする。

「二門」とは、「真如門」と「生滅門」である。前章「立義分」で解釈される「三十二法門」をみると、能入門として「一体門」・「三自門」と説かれる。その二門を『釋論』は「解釈分」において「真如門」・「生滅門」として捉え、[1] さらに所入法の「一体摩訶衍法」・「三自摩訶衍法」の二種と一組にして「四種法」と命名する。これが所入法の「二法」と能入門の「二門」の関係である。以上の「四種法」に「十種名」が展開されるのである。

その内容は四種とあるものの本論の注釈書であることから「一心」・「二門」・「三大」の構造を踏襲した「一心」・「二法」・「二門」の構想と推察される。つまり『釋論』は「一心」・「二法」・「二門」の構造について各々「十種名」が説示されるとする。

続けて『釋論』は「三十三法門」と関連付した十種ある「摂義論」の内、『起信論』のみを取り上げ、他の九種に残りの法門（「二十九法門」）説示を譲る体裁をとっている。[2]『釋論』は「四種法」のみを解釈する意思を表明していることになる。

本考察では、「十種名」を検討する手順として、まず「二門」の性質を踏まえたい。要するに本論所説の「一心」・「二門」の内容と、『釋論』の理解について述べたい。その後「四種法」について検討し、順次「一心」・「二法」・「二門」における「十種名」について考察したいと考えている。

一、「立義分」・「解釈分」の「二門」と『釋摩訶衍論』の理解

Ⅰ「立義分」・「解釈分」の「二門」について

本項では、まず『起信論』における「二門」について「立義分」と「解釈分」の内容について考察し、その後『釋論』の解釈を検討する。それでは『起信論』「立義分」について考えてみる。それについてみると、

「摩訶衍者。總說有二二種一。云何為レ二。一者法。二者義。所レ言法者。謂衆生心。是心則攝二一切世間法出世間法一。依二於此一心顯二示摩訶衍義一。何以故。是心真如相。即示二摩訶衍體一故。是心生滅因緣相。能示二摩訶衍自體相用一故。所レ言義者。則有二三種一。云何為レ三。一者體大。謂一切法真如平等不二增減一故。二者相大。謂如來藏具二足無量性功德一故。三者用大。能生二一切世間出世間善因果一故。一切諸佛本所乘故。一切菩薩皆乘二此法一到二如來地一故」[3]

と説き、「摩訶衍」から「法」と「義」が説かれ、「法」から「衆生心」、以降に「二門」そして「三大」が展開される。

二門とは、「衆生心」という衆生の心の在り様を二門に分ける。その特徴は、「真如門」は「体」、「生滅門」は「体相用」と説き、真如という悟りの在り方を顕し、生滅という迷いの在り方を顕す。「摩訶衍」（大乗）の「法」の義が「衆生心」より説示されている。

衆生の心を明らかにしているのが「体」と「体相用」といえる。「体」は「摩訶衍」（大乗）の「体」となる。「体相用」は、「義」の内容を見てみると、「体」を、「摩訶衍」（大乗）の「体」で一切法の真如、「相」を「如来蔵」を具足する属性、「用」を前二種のはたらきをあらわすものと説く。なぜ「自」があるのかについてはここでは説かれて

いない。

次に「解釈分」をみてみる。「真如門」について、「心真如者。即是一法界大總相法門體。所謂心性不生不滅。一切諸法唯依二妄念一而有二差別一。若離二妄念一則無二一切境界之相一。」[4]と説いている。

それは、「一法界大総相で法門の体」、そして「心性の不生不滅」であるとする。

一方、「生滅門」とは、「心生滅者。依二如來藏一故有二生滅心一。所レ謂不生不滅與二生滅一和合非レ一非レ異。名為二阿梨耶識一。」[5]と説き、「如来蔵に依る故に生滅心」とあり、「不生不滅と生滅が和合する」と説示する。「真如門」の「一法界」、「生滅門」の「如来蔵」、そして「二門」に共通する「不生不滅」が特徴としてあげられる。それらをもとに今度は『釋論』の解釈をみてみる。

Ⅱ『釋摩訶衍論』の「二門」理解

「立義分」における二門について、『釋論』は、

「論曰。總標二能入二種門一故。言二依於此心一。總標二所入二種法一故。言二顯示摩訶衍義一。云何為二二門一。一者心真如門。二者心生滅門。云何為二二本法一。一者一體摩訶衍。二者自體自相自用摩訶衍。如レ是所入二種本法。或從二能入一建二立其名一。所レ謂以二真如體一。而為二其門一所二趣入一故。名言為レ體。以二自相本覺心一。而為二其門一所二趣入一故。名言為レ自。由二能入門二種別一故。所入本法有レ二應レ知。何以故者。即請問辭。謂由二何義一。依於此心句中具二二種門一。顯示摩訶衍義句中具二二種本法一者焉[6]」

と説き、「真如門」から「一体摩訶衍法」、「生滅門」より「自体自相自用摩訶衍法（三自摩訶衍法）」の二種の本法をあらわすと説く。「二種本法」とは「二法」のことである。

「真如門」に「体」が説かれることについては、「真如体」と説く。「生滅門」に「自」があることについては、各々違う能入門、すなわち「生滅門」から所入法として開かれると説く。要するに「生滅門」と「真如門」の性質が異なることを示している。

さらに『釋論』は「生滅門」（三自摩訶衍）の「自」について、

「依二生滅門一所二趣入一之摩訶衍法立二自名一耶。真如門中無二他相一故。生滅門中有二他相一故。他謂一切不善品法。自謂一切清淨品法。若所對治他無。能對治自無故。唯言レ體不レ說自焉。若所對治他有。能對治自有。故名言レ自不二唯體一焉[7]」

とし、「生滅門」の「自」は「他相」によると説く。「他相」の「他」は「不善法」であり、「自」は「清浄法」をあらわす。「生滅門」の中に染浄の二種の在り方があると『釋論』は主張していることになる。一方、「真如門」については不善である染法に依らない在り方といえよう。

次に、「解釈分」での「一法界」・「如来蔵」・「不生不滅」の解釈についてみてみる。

「真如門」における「一法界」について『釋論』は、

「心真如者即是一法界大總相法門體者。即是建立名字門。謂隨二功能一立二其名一故。（中略）一心作二大業一。法作二總業一。界作二業一。故法之門。門則是體。是故說言法門體[8]」

「一心」を「大業」とし、「法」を「総業」する。続いて「界」を「相業」と説く。つまり「衆生心」の働きと、一切の「聖法」（法業）を出生する「因」（界）[9]をあらわしている。

「如来蔵」については、「依如來藏故者。所依一心。彼多一心亦名二如來藏一故。則是上心字下降建二立異名一故[10]。」とあり、「衆生心」を所依として、「多一心」を「如来蔵」と説いている。「上」は「心」から、「下」は降りて様々な「異名」を建立するとする。「如来蔵」が「衆生心」を所依として上下の幅広い層をあらわして「多一心」と表現していると見ることができる。

「不生不滅」については、

「總攝二一切無為法一故。是故名為二不生不滅一。不生不滅諸無為法之總相故。總攝二一切有為法一故。故名二生滅一。生滅之言諸有為法之總相故。如レ是有為無為二法各有二幾數[11]一」

とし、「不生不滅」とは「無為法」、「生滅」は「有為法」をあらわす。それぞれが「総相」であると説く。つまり「真如門」の性質とは「無為法」で一切の清浄法（善法）を総摂し出生する門。「生滅門」の性質とは「有為法」で清浄法と染法の二種を合わせ総摂した門。そして迷いの世界にいる衆生の心を「多一心」として「如来蔵」であると説いている。

二、「四種法」について

先の検討の結果、『釋論』の「二門」理解は、「真如門」を浄法、「生滅門」を染法と浄法としていた。

「生滅門」における「自」については、「他相」である「不善法」を有するため、善法と不善法が和合した状態、染浄法を「三自」と説いていた。「如来蔵」については、「衆生心」を所依として幅広い層を表現し「多一心」としていた。以上を踏まえて、『釋論』が「解釈分」において解釈する「四種法」について考えみたい。そこには、

「論曰。解釋分中唯釋二四法。所餘法門略不二別釋一。云何為レ四。一者一體摩訶衍。二者三自摩訶衍。三者真如門。四者生滅門。何故餘法略不二解釋一。一心遍滿等九論中已解釋故」[12]

と説き、『釋論』は「解釈分」解釈において「四種法」を説示している。はじめにで触れたように、「四種法」とは「一体摩訶衍法」と「三自摩訶衍法」、そして「真如門」と「生滅門」の計四種を指す。残りの法門に関しては、『起信論』を除いた九種の論書において解釈されると説く。

九種の論とは『起信論』を含めた「十種摂義論」のことで、「三十三法門」それぞれに関係する。『起信論』が「一体摩訶衍法」と「三自摩訶衍法」、そして「真如門」と「生滅門」の四種が関係するように、一つの論書に各四種法が解説されているとする。すなわち、この「解釈分」解釈では『釋論』が本論の注釈書として前述の四種法について解釈を行うことを表明している。

「二法」・「二門」の四種法とあるが、本論の「一心」・「二門」の構造をもとに構想された、「一心」・「二法」・「二門」の三種の構造について論説していることになる。「十種名」との関係は、「一心」に十種、「二法」に各十種、「二門」に各十種、計五十種の名前が展開される。次項でその内容について検討していきたい。

三、「一心」・「二法」における「十種名」

『釋論』は「一心」と「二法」について、十種の名前をあげ性質の相異を示す。[13]その内容について図にしたものが資料①である。[14]

①から⑩の「広大神王」や「如意珠」、「如来蔵」、「一法界」、「摩訶衍」等々は、二種の本をあらわす「一心」の別名である。一から十と㊀から㊉は「二法」の別名である。それらを本論の構造と照らし合わせると「一心」が「広大神王」等であり、「二法」は「金剛神王」で真如法、「主海神王」は生滅法となる。要するに「一心」に対する十種名と、「一体摩訶衍法」の十種名、「三自摩訶衍法」の十種名、計三十種がここで説示されていることになる。[15]一方で「二門」について直接は触れられていない。

内容について検討していく。この「十種名」について『釋論』はそれぞれに経典を引き、教証につとめている。その逐一には紙幅の都合ふれない。

まず資料について①から⑩を説明すると、「一心」の「十種名」をあらわしている。数字は前述同様、「二法」の「十種名」で、以下にある文はその性質を論説したものをあげた。

①「広大神王」は、「立義分」解釈上の「広大神王」と同一で内容も一致している。[16]また、⑧の「摩訶衍」も「立義分」での論説を述べて詳細を割愛している。

⑦「一法界」と⑩「一心」に注目すると、「一心」と極めて近い名称が配置されている。特に⑩の「一心」説示をみると、『釋論』「解釈分」解釈における「如来蔵」理解の説示と近い表現とられている。「真如」（一体摩訶衍法）を「一に因る」とし、「生滅」（三自摩訶衍法）を「多に因る」と説き、「一一心」と「多一心」が連想される。

資料①

一心	二法	
① 広大神王	一、金剛神王	【真如】一体本法は一向に真如浄法を出生す
	㊀、主海神王	〈生滅〉三自本法は遍満して一切種種の浄白品法と染汚品法を出生するが故に
② 大虚空王	二、空自在空王	【真如】一体空王は無住処を以て自在とし
	㊁、色自在空王	〈生滅〉三自空王は有住処を以て自在とするが故に
③ 出生龍王	三、光明龍王	【真如】一体本法は純浄の法を以て而もその体とし
	㊂、風水龍王	〈生滅〉三自本法は染浄の法を以て而もその徳とるが故に
④ 如意珠	四、金主龍王	【真如】一体如意は唯浄法を生じ
	㊃、満主龍王	〈生滅〉三自如意は通じて洗浄を生ずるが故に
⑤ 方等	五、白色方等	【真如】清浄法界は白必薩伊尼羅の如く
	㊄、乱色方等	〈生滅〉無尽法界は乱必薩伊尼羅の如くなるが故に
⑥ 如来蔵	六、遠転遠縛	【真如】唯覚者有り唯如如有り流転の因を離れ慮知の縛を離れて一一白白なり
	㊅、與行與相	〈生滅〉善不善の因と為して苦楽を受く因と倶に若しくは生じ若しくは滅す
⑦ 一法界	七、純白一法界	【真如】空種の無礙は空の長時の如く
	㊆、無尽一法界	〈生滅〉遍種の無礙は有の長時の如くなるが故に
⑧ 摩訶衍	八、一体摩訶衍	【真如】一切清浄の法と一切無礙の法と一切解脱の法と（中略）一切寂静の法を摂す
	㊇、三自摩訶衍	〈生滅〉一切種種の無明と一切種種の染法と、一切種種の浄白品の法を摂し
⑨ 中実	九、等住中実	【真如】若し真如に依れば異同珠の如く
	㊈、別住中実	〈生滅〉若し生滅に依れば同異種の如くなるが故に
⑩ 一心	十、是一是一心	【真如】真如の一心は一に因るが故に一なり
	㊉、是一切是一心	〈生滅〉生滅の一心は多に因るが故に一なりと言もう

これらを踏まえて⑥の「如来蔵」をみると、真如法を「流転の因を離れ」とあり、覚者のみの「如来蔵」。生滅法を「苦楽を受く因と倶に」とあり、「多一心」である衆生の「如来蔵」が説いている。

前者は流転の因を超えた善のみの法、後者は流転の因と共にある善と不善の二種が和合した法となる。つまり「一心」の別名である「如来蔵」が二法に共通した思想であるといえる。一方で、『釋論』では①「神王」や②「空王」、そして③「龍王」が至る所で説示に用いられている。ここでも⑥「如来蔵」所説「真如」の説示を踏まえると、出生される他の別名である真如法の「神王」や「龍王」等は「覚者」ということになる。一方で生滅法は迷える衆生である凡夫となるだろう。

四、「二門」における「十種名」

では「二門」における「十種名」について検討する。『釋論』は先に「真如門」について十種の異名をあげている。以下にそれをあげる。（番号筆者）

「①婆伽婆倶舎　②健遮阿多那　③必菩提婆梨　④健訶健婆那　⑤阿陀阿只尼
⑥阿伽阿始耶　⑦度羅諾補帝　⑧漠呼健那地　⑨摩訶標陀一　⑩婆阿叉尼羅　如是十種名　真如不共稱[17]」

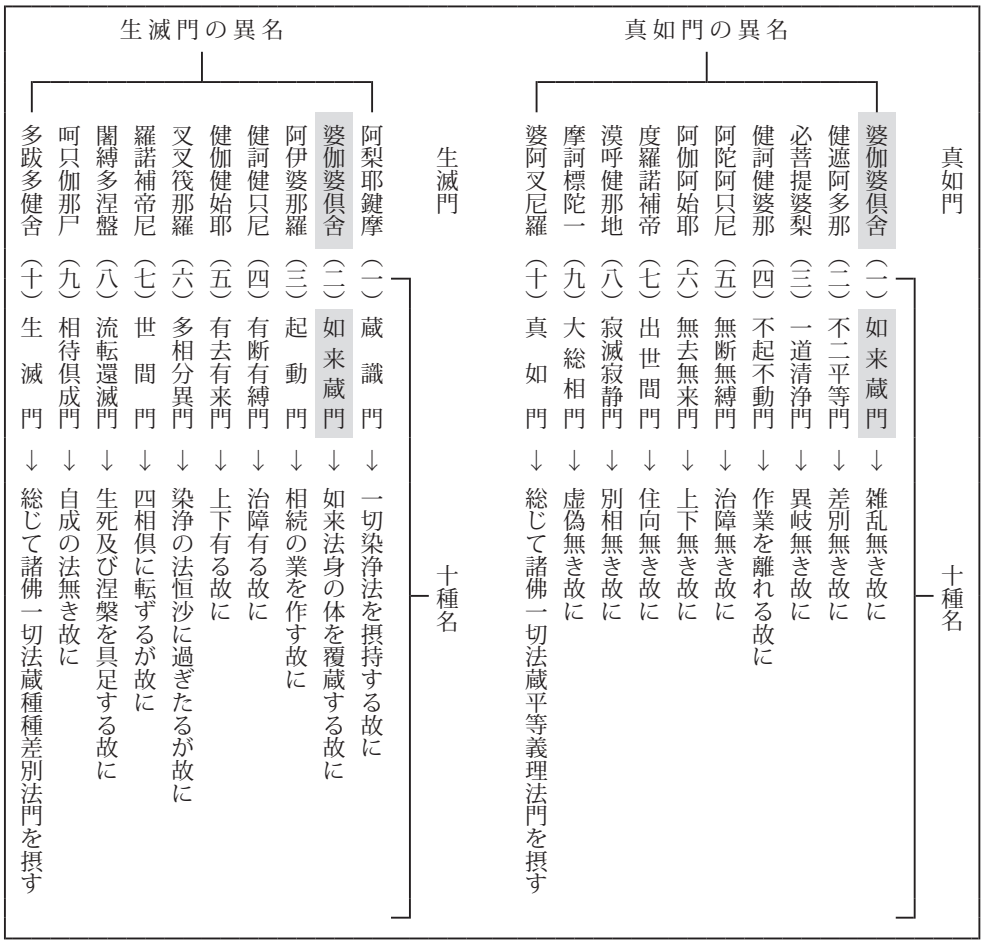
①から⑩は、真如門の異名である。[18]その十種の異名が「真如門」特有の名称であって「生滅門」には通じないことを説く。「生滅門」にも十種の異名が説かれている。[19]それでは「二門」の異名と十種名を図として載せる。資料②である。表記については「真如門の異名」・「生滅門の異名」としてあげ、下に「十種名」を載せる。

二種の異名を比べると、「婆伽婆倶舎」が共通して説かれている。これについて那須盛隆博士は、十種の異名について梵語の音写語であり、その訳語が次下の長行の釈に出ていると述べている。[20]

これをもとに、「婆伽婆倶舎」をみてみると、「二門」の「十種名」である「如来蔵門」の場所と一致している。つまり二門に共通する異名の「婆伽婆倶舎」は、二門に共通する「十種名」「如来蔵門」の梵語であることになり、「如来蔵門」は訳語になろう。ここでも「一心」・「二法」・「二門」、三種に「如来蔵」が共通していることになる。

では「二門」の「十種名」を検討する。「二門」の対応関係を図にしたものが資料③である。

資料②



先程のように「如来蔵門」が二門に共通して説かれる。「二法」でも「如来蔵」が共通して説かれていた。筆者はこの「如来蔵」が先の「一心」・「二法」・「二門」の構造に大きく関係する特徴と推察する。「真如門」における「如来蔵門」の説示箇所をあげると、「一者名為二如来蔵門一。無二雑亂一故[21]」とあり、「生滅門」における「如来蔵門」では、「二者名為二如來藏一門。覆二藏如來法身體一故[22]」と説いている。

真如門は、雑乱しないことをあらわし、生滅門は染法に覆われてしまった覚者（如来法身・法身）をあらわしている。

そもそも「如来蔵」とは、本論「生滅門」中に説かれる。以上と関連する思想に「十種如来蔵」[23]がある。

それは「十種名」以降の「心生滅」解釈において説かれる。「生滅門」側の説示であると確認できる。一方で真如の如来蔵についても説いていることから真如生滅の関係を推察する上で重要な思想といえよう。そういったことから本考察の手掛かりとしたい。

四番目にあたる箇所に「真如真如如来蔵」が説かれる。そこには、

「四者真如真如如來藏。唯有レ如故。真修契經中作二如レ是說一。如理如理如來藏。非二建立一非二誹謗一。非レ常非二無常一。（中略）此經文明二何義一。所謂顯三示真如門中性真如理。唯理自理非二智自理一故。以二何義一故名二如來藏一。謂無レ他故」[24]

とあり、真如門の中にある「如来蔵」は「真如真如如来蔵」であると説く。「他無きが故に」としており、「他」は先の検討を踏まえると「一切不善法」を指しており、それに依らないのが真如の「如来蔵」ということになる。

では次に「生滅門」の「如来蔵」についてみてみると、

「五者生滅真如如來藏不生不滅被二生滅之染一故。楞伽契經中作二如レ是說一。大慧。愚癡凡夫不レ覺不レ知。執著二諸法刹那不レ住。墮在二邪見一而作二是言一。無漏之法亦刹那不レ住。破二彼真如如來藏一故。（中略）此經文明二何義一。所レ謂顯下示生滅門中性真如理。遠二離無常之相一不生不滅之法上故。以二何義一故二名如來藏一。謂被染故」[25]

とあり、「生滅門」の「如来蔵」を「生滅真如如来蔵」とする。「無漏法」がこの「如来蔵」に「住」せず「真如如来蔵」を「壊」すと説く。つまり「生滅真如如来蔵」とは「不生不滅」と「生滅」の法を被っている状態にある。

「不生不滅」すなわち「浄法」の性質が「真如門」の「如来蔵」と捉えるならば、「染法」の「生滅」と「浄法」の「不生不滅」が和合しあう状態にあるのが「生滅門」の「如来蔵」となるだろう。本論の「不生不滅」と「生滅」は浄法と染法とをあらわし、「和合」は「生滅門」における染浄法の状態を意味している。

以上二種の「如来蔵」について検討した結果、「如来蔵」が「二門」に共通している。本考察では深く触れないが「体相用」・「自体相用」の問題も深く関係すると考えられる。

それでは「二門」についてまとめてみたい。「真如門」には①から⑩の数字を、「生滅門」には（1）から（10）の数字を付して、「二門」の特徴について対比しながら述べることとする。

まず①「如来蔵門」とは、真如の理そのものを顕示すると説く。他の干渉を受けず状態が雑乱しないことをこの「如来蔵門」では説き、唯覚者のみの世界ということになる。「生滅門」の（2）「如来蔵門」は、染浄二種の法があって、染法が如来法身（法身）を覆ってしまうと説示している。

②「不二平等門」は、真如の不二を表現する。対して「生滅門」側の門は、（1）「蔵識門」である。この門は、「識」である「阿梨耶識」を蔵していると説く。異名にある「阿梨耶鍵摩」も「阿梨耶識」のことを指している。この門は染浄の法である、「有為法」と「無為法」を包含し、それらの法を「摂持」している門であると説く。

③「一道清浄門」は、「二門」の相が異なる相・性質であるため「異岐」と説く。すなわち「真如門」は清浄の法のみであると説く。「生滅門」側は（6）「多相分異門」である。この門は、「蔵識門」同様、染浄の有為法と無為法が「恒沙」のように無数にあるため「多相」にして「異分」と説く。

④「不起不動門」は、「真如」の本質である「理」が本来原理的に相対性を必要せず「作業」が存在しないと説く。それに対し立てられる「生滅門」の（3）「起動門」は、染浄の影響を絶え間なく「相続」すると説く。

⑤「無断無縛門」は、「障」がないため当然「治」の働きがないと説く。それに対立する（4）「有断有縛門」は、「障」が有り、それを除く「治」も有ると説く。ここでも染法と浄法の相対関係が説かれる。

⑥「無去無来門」は、「真如門」に「上下」の関係が無いことを説く。対して「生滅門」の（5）「有去有来門」は、上下に亘る染浄の相が絶え間なく有ると説く。

⑦「出世間門」は、「四相」という「生住異滅」を超えたものであるとして「出世間」と説く。対する「生滅門」（7）「世間門」は、「生住異滅」を「生滅門」の名の如く、生滅に依て永く変化していくため「四相」があり「世間」を離脱できないと説く。

⑧「寂滅寂静門」は、流転還滅の往来が無い。対して「生滅門」は（8）「流転還滅門」である。この門は文字のとおり「生滅門」が染浄の関係によって流転還滅することを説いている。

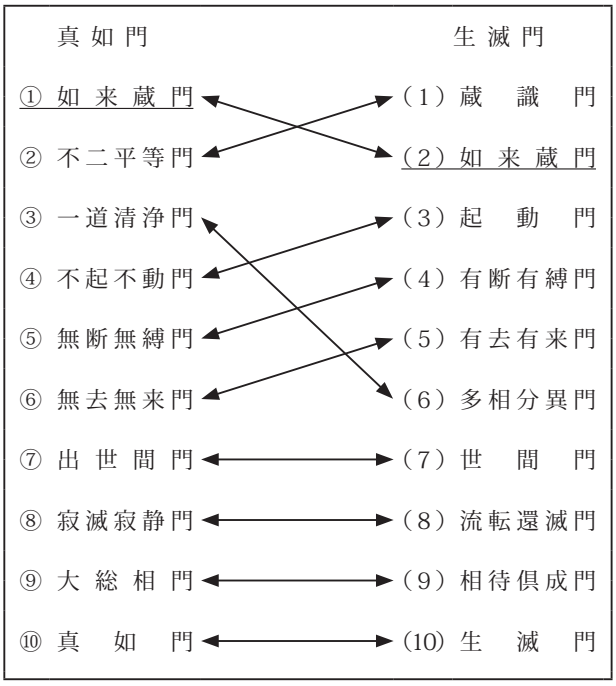
⑨「大総相門」は、「別相」が無く「総相」であると説く。本論所説の真如門における「大総相法門体」の語を門に用いている。対するは（9）「相待俱成門」で、「自成法無き」

とあるように自らの法が無い。染浄の法に依るため自立していないことをあらわす。

⑩「真如門」は、①から⑨までの総結で、常に「虚偽」無く真実であり、あるがままと説く。対するは(10)「生滅門」である。これも(1)から(9)までの総結である。染法と浄法の差別諸法を総べる法門である。「二門」は「二法」での検討の結果からも能入の門である。「二法」・「二門」はともに真如法・真如門、生滅法・生滅門の法と門の性質が所入法と能入門によって展開されている。

「如来蔵門」以外の十種名の関係は、資料③をみてみると、語句それぞれ対立する門がある。それは、「不起不動門」に対し「起動門」、「無断無縛門」に対し「有断有縛門」、「無去無来門」に対し「有去有来門」、「出世間門」に対し「世間門」。以上四種があげられる。必ずしも門の順番と一致していない。それ以外の十種名については、思想面において門同士が対立している。委しくは資料③をご覧頂きたい。「如来蔵門」での検討のとおり、真如門が「浄法」、生滅門が「染浄法」の性質であることが確認できた。そして浄法の如来蔵があり、逆に染法に覆われた如来蔵がある。「一心」・「二法」・「二門」に共通した「如来蔵」思想があることを確認した。

資料③



五、「二法」と「二門」の同異について

「二法」と「二門」は本論の「一心」・「二門」構造を踏まえており、所入法能入門の関係にある。「二法」の上にある十種の「広大神王」や「出生龍王」等は、「一心」をあらわし、その下に展開された法、「一体摩訶衍法」の十種名「金剛神王」等は真如法、そし「三自摩訶衍法」の十種名「主海神王」等は生滅法をあらわしている。そして「二法」・「二門」には「一心」の十種名の一つとして説かれる「如来蔵」が二法と二門に共通する思想であることを確認した。

本項では『釋論』が「二法」・「二門」に同異説を展開する箇所がある。その箇所を検討し、「十種名」の考察を終えたい。その内容とは「二法」に「三異二同」。「二門」に「七異一同」の同異があると説いている。[26]

先に「二法」の「三異二同」について検討したい。それには、

「論曰。二種本法有二三異二同一。云何為二三異一。一者依異。各有二所依摩訶衍一故。二者門異。各具二能入門差別一故。三者境異。各縁二自依一為二境界一故。是名為二三異一。云何為二二同一。一者遍同。周二遍法界一等二其量一故。二者名同。十種名字通二二法一故。是名為二二同一。何故如レ是。同名異義故[27]」

とある。「三異」とは①「依異」、②「門異」、③「境異」。「二同」とは1、「遍同」、2、「名同」である。「三異二同」と「七異一同」について図にしたものが資料④である。「七異一同」については後ほど考察を行う。それでは「三異二同」について順にまとめてみたい。

①「依異」とは所依の「摩訶衍法」が異なると説いている。「一体摩訶衍法」は「真如門」側の法であり、「三自摩訶衍法」は「生滅門」側の法である。

②「門異」とは「能入門差別」について説いている。「一体摩訶衍法」には「一体門」、「三自摩訶衍法」には「三自門」が門として関連し、一法一門の対応関係をここでは説いている。例えば、別の法門をあげると「一体一心摩訶衍法」には「一体一心門」、「三自一心摩訶衍法」には「三自摩訶衍法」となる。

③「境異」は②の内容と同じく法と門の関係は一法一門であって、縁により所依とする法門がある。境界に入るには、当然、縁に依った法があり、それぞれの境界へ赴く在り方（門）があって一々の法を獲得するということになる。すなわち「真如門」は「一体摩訶衍法」、「生滅門」は「三自摩訶衍法」となる。

資料④

「三異二同」

一体摩訶衍法	三自摩訶衍法
①依　異↓一体摩訶衍法	三自摩訶衍衍法
②門　異↓一体門（真如門）	三自門（生滅門）
③境　異↓一体摩訶衍法	三自摩訶衍法
1 遍　同↓周遍法界	等其量故
2 名　同↓十種名字	通二法故

「七異一同」

真如門	生滅門
①衆　異↓清浄解脱者	三聚諸衆生
②法門　異↓一向清浄品	一切染浄法
③所依　異↓所依摩訶衍	所依摩訶衍
④行法　異↓一心一念生縛	以生滅生以滅滅滅
⑤体相　異↓体相異	体相異
⑥境界　異↓境界異	境界異
⑦地位　異↓相雑住	住向住
1 遍同↓遍同	同故

1、「遍同」は、「一体摩訶衍法」・「三自摩訶衍法」は共に「摩訶衍」で法である。その「法」は等しく「法界」に「周遍」している。つまり法の持つ染浄法の性質が異なっても「法界」に至っては差別なく等しく遍満するのである。

2、「名同」とは、「二法」の「十種名」があげられる。「一心」の十種名から展開する真如法と生滅法の計二十種の名前は、もとはすべて「一体摩訶衍法」と「三自摩訶衍法」と同一で全て通じる。それを十種の別な名前をもって法の性質を再説しているのである。以上が「三異二同」である。

では次に「二門」における「七異一同」について検討する。まず説示箇所をあげると、

「論曰。是二種門有二七異一同一。云何為二七異一。一者人衆生異。真如門中唯有二一向清白品一故。生滅門中備有二一切染浄法一故。三者所依異。各有二所依摩訶衍一故。四者行法異。真如門中一心一念生縛。不レ生以為二其行一故。生滅門中以レ生レ滅生以レ滅滅レ滅。以為二其行一故。五者體相異。心真如門與其本等故。心生滅門與二其本一別故。楞伽契經中作二如レ是說一。寂滅者名為二一心一。一心者名二如來藏一故。六者境界異。各緣二自依一為二境界一故。七者位地異。真如門中相雑住故。生滅門中往向住故。是名為二七異一。云何為二一同一。所レ謂遍同故。何故如レ是。異名異義故[28]」

と説いている。「七異」とは①「人衆異」、②「法門異」、③「所依異」、④「行法異」、⑤「体相異」、⑥「境界異」、⑦「地位異」。「一同」とは「遍同」である。それでは①から「遍同」まで順に進めたい。

①「人衆異」とは衆生の種類について説いている。「真如門」は「清浄解脱者」、「生滅門」は「三聚諸衆生」と説く。「三聚」とは「邪定聚」・「不定聚」・「正定聚」の三種機根である。『釋論』は「因縁分」解釈より「三十二法門」と関連させて説示している。「邪定聚」は十億八万六千種の衆生、「不定聚」は三十種の衆生、「正定聚」は一百二十種の衆生が「三十二法門」を通して「生滅門」に関連すると推察する。つまり真如門とは「清浄解脱者」である「覚者」の衆生が対象で、生滅門とは「三聚諸衆生」を対象としている。衆生に応じた門があり、煩悩の厚薄が関係している。法身が煩悩に深く覆われた状態が「生滅門」の「如来蔵」で、煩悩に影響されない状態が「真如門」の「如来蔵」となろう。

一方で「衆生」の理解について『釋論』は「立義分」解釈において独特な理解をする。それは「衆生」を「衆」と「生」に分割とする。「四衆」として「如来」・「菩薩」・「声聞」・「縁覚」説き、「四生」として「卵生」・「胎生」・「濕生」・「化生」説き、計八種に展開するのである。[29] これらの「衆生」理解が「立義分」解釈で導入される以上、この「人衆」との関わりも当然あるといえよう。

②「法門異」は「真如門」を「一向清品法」、「生滅門」を「一切染浄法」と説く。「二門」の性質を再説している。

③「所依異」は先の検討と同様「一体門」に対し「一体摩訶衍法」、「三自門」に対し「三自摩訶衍法」が所依として関連することを説く。

④「行位異」は「二門」の「十種名」において、「無断無縛門」と「有断有縛門」で説かれるように、「真如門」に心念無く、「生滅門」に心念あることを説く。「生滅門」は「生住異滅」の「四相」が説かれるため「生を以て生を滅し滅を以て滅を滅す」とする。「真如門」は「不生不滅」の法、「生滅門」は「生滅」と「不生不滅」の和合した法であると説いている。

⑤「体相異」とは、「真如門」は「本と等しい」と説き、「生滅門」は「本と別」であると説いている。すなわち「寂滅とは一心。一心とは如来蔵と名づく」[30]とあるように、「二門」は共に「一心」を所依とするが、能入の関係で「一に因る」か「多に因る」かによって「体相」が異なることをあらわす。

⑥「境界異」は、「二法」の「三異二同」の内「境異」と同じである。「真如門」が「一体摩訶衍法」を境界とし、「生滅門」は「三自摩訶衍法」を境界とする。

⑦「地位異」は、「十種名」所説「無去無来門」・「有去有来門」の内容と関連する。「真如門」は「無去無来門」にして「不生不滅」であって「上下」の階位差別がはじめから存在しない。「生滅門」は「有去有来門」にして「生滅」と「不生不滅」の和合する迷いの世界が展開されるため、「上下」間の行き来の差別が生じる、これにより階位の差別が生ずることを示す。また『釋論』は「地位」の説示について、『大本楞伽經』・『分流楞伽經』・『真修契経』以上三種を経証として引く。

最後に「一同」についてであるが、「遍同」は、これも「三異二同」の内の「遍同」と同じである。「二門」が「法界」に等しく周遍していることを説いている。以上が「二門」における「七異一同」についてである。

「二法」における「三異二同」は「一体摩訶衍法」に対し「真如門」、「三自摩訶衍法」に対し「生滅門」が所入法と能入門の関係で論説されており、「二法」の性質が浄法と染浄法の二種となっている。そのため、入口の門や獲得する教法に相異がある。しかし「二法」の性質に相異はあるものの、「法界」において遍満する量は差別が無く等しく、境界の差異が無いことを確認した。

「二門」における「七異一同」は、「衆異」・「門異」・「体相異」等について説かれていた。衆生の種類や法門の性質等の相異があった。「三異二同」と同様に、「二門」は「二法」の教法を獲得するための入口である。対象とする衆生に「如来蔵」の染と浄の状態によって対応する「門」より入り、「法」を得るということになる。つまり衆生の種類において、真如の側は「清浄解脱者」で「覚者」、生滅の側は「三聚諸衆生」となる。

六、まとめ

「十種名」とは「一心」・「二法」・「二門」の三種において各々十種の名前が説示されている。「二法」は「一体摩訶衍法」と「三自摩訶衍法」、「二門」は「真如門」と「生滅門」、その根幹に位置する「一心」、計五十種の名前を説いていたことになる。

『釋論』は「一心」・「二法」・「二門」について、本論の「一心」・「二門」・「三大」の構造を理解し反映していた。その性質は「真如門」・「一体摩訶衍法」を「浄法」、「生滅門」・「三自摩訶衍法」を「染浄法」として捉えていた。多種にわたる名前は、「一心」・「二法」・「二門」に内在する性質について代名詞的な役割を担っていたと推察する。

つまり「一心」・「二法」・「二門」の性質を十種の名前として名義化したものといえよう。特に「一心」と「二法」の「十種名」として説かれた「如来蔵」と、「二門」の「十種名」として説かれる「如来蔵門」は、「一心」・「二法」・「二門」に「如来蔵」が関連していることを示している。「真如門」・「一体摩訶衍法」には浄法の如来蔵と、「生滅門」・「三自摩訶衍法」には染浄法の如来蔵の性質があるということになる。

要するに「一心」には「如来蔵」、「二法」には「唯一覚者」と「覆如来法身」として「如来蔵」が関連しており、「二門」には梵語の「婆伽婆倶舎」と訳語の「如来蔵門」が説かれている。一貫して「如来蔵」の思想が説示されており、衆生に蔵する如来の浄と染の在り方が「一心」を通して「二法」・「二門」において展開された『釋論』の特徴といえよう。

また、「二法」の「三異二同」における、十種の特徴的な名前が二法に通じるとする「名同」、「二門」の「七異一同」における「人衆異」での「真如門」に「清浄解脱者」、「生滅門」には「三聚諸衆生」を対象とする説示は「二法」・「二門」の特徴を再説するための手法といえよう。

結論として「二門」における「十種名」は「一心」・「二法」・「二門」について説示されたもので、それらが「一心」・「二法」・「二門」が一組で説かれるもので、別々に検討することは最適ではないことを確認した。

今後の課題としては、本考察では終始、構造理解に重点が置かれてしまい、「二法」・「二門」に関係する他の思想の考察ができなかった。引き続き関連性を考察したい。

註

(1)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇一頁上
(2)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇二頁上
(3)『大乗起信論』大正蔵三二巻　五七五頁下
(4)『大乗起信論』大正蔵三二巻　五七六頁上
(5)『大乗起信論』大正蔵三二巻　五七六頁中
(6)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇一頁上―中
(7)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇一頁下
(8)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇五頁下
(9)『新国訳大蔵経』「仏性論」・「大乗起信論」四七五頁
(10)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇八頁上
(11)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇九頁上
(12)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇二頁上
(13)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇二頁下―六〇三頁上
(14)「二種本法」の図について、既に那須盛隆博士（『釋摩訶衍論講義』一五〇―一五一頁）と森田隆僊師（『釋摩訶衍論之研究』一五六―一五九頁）による図が論文において提出されている。筆者は、お二人の理解を参考とさせて頂き本稿において図を載せた。お二人のものとは若干の違いがあるのは、本稿において主題とする「二種本法」の性質を捉えるため、引用する原文を数例ある内から、適当と判断をしたものを載せる。理解は同じものと考える。
(15)森田龍僊著『釋摩訶衍論之研究』（うしお書店　一九九九年）一五五―一六二頁
(16)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇一頁上
(17)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇四頁上
(18)那須盛隆著『釋摩訶衍論講義』（大本山成田山新勝寺　一九九二年）一六一頁
(19)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇四頁中「①阿梨耶鍵摩　②婆伽婆倶舎　③阿伊婆那羅　④健訶健只尼　⑤健伽健始耶　⑥叉叉筏那羅　⑦羅諾補帝尼　⑧闍縛多涅盤　⑨呵只伽那尸　⑩多跋多健舎　如是十種名　生滅不共稱」（番号筆者）「真如門」同様十種の別名を説く。
(20)那須盛隆著『釋摩訶衍論講義』（大本山成田山新勝寺　一九九二年）一六一頁
(21)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇四頁上
(22)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇四頁中
(23)藤田隆淳著「「釈摩訶衍論」に説かれる十種如来蔵」（『密教文化』第一三一号所収）
(24)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇八頁中
(25)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇八頁中
(26)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇四頁中―下
(27)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇四頁中―下
(28)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇四頁下
(29)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇〇頁下
(30)『釋摩訶衍論』大正蔵三二巻　六〇四頁下